

# 国

## 語

(配  
点)

1	30 点
2	40 点
3	30 点

### (注意事項)

- 1 問題冊子は指示があるまで開かないこと。
- 2 問題冊子は一ページから十八ページまである。検査開始の合図のあとで確かめること。
- 3 検査中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、静かに手を高く挙げて監督者に知らせること。
- 4 解答用紙に氏名と受験番号を記入し、受験番号と一致したマーク部分を塗りつぶすこと。
- 5 解答には、必ず**HBの黒鉛筆**を使用すること。なお、解答用紙に必要事項が正しく記入されていない場合、または解答用紙に記載してある「マーク部分塗りつぶしの見本」のとおりにマーク部分が塗りつぶされていない場合は、解答が無効になることがある。
- 6 一つの解答欄に対しても複数のマーク部分を塗りつぶしている場合、または指定された解答欄以外のマーク部分を塗りつぶしている場合は、有効な解答にはならない。
- 7 解答を訂正するときは、きれいに消して、消しきずを残さないこと。

# 著作権の関係上、非公開

<sup>1</sup>次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。

# 著作権の関係上、非公開

# 著作権の関係上、非公開

問3

- （注1）兼好<sup>（1）</sup>鎌倉末期の歌人、隨筆家で『徒然草』の著者。
- （注2）闕<sup>（2）</sup>門の内外を区切る境の木。敷居。
- （注3）鞍<sup>（3）</sup>人が乗りやすいように馬などの背につける道具。
- （注4）轡<sup>（4）</sup>手綱をつけるために、馬の口にかませる金具。
- （注5）双六<sup>（5）</sup>盤と二個のサイコロ、黑白の駒を使って二人で行う遊戯。賭け事にも用いた。
- （注6）通曉する<sup>（6）</sup>あることについて詳しく知っている。
- （注7）博打<sup>（7）</sup>（を打つ）=賭け事（をする）。「博打打ち」は博打で生計を立てる人。
- 問1 本文中の、ゴウ情<sup>（1）</sup>、カン髪<sup>（2）</sup>を入れず、世ヅク<sup>（3）</sup>、攻セイ<sup>（4）</sup> のカタカナ部分の漢字表記として適当なものを、それぞれアからエまでの中から一つ選べ。
- |      |   |   |   |   |   |   |   |   |
|------|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ①ゴウ情 | ア | 業 | イ | 豪 | ウ | 合 | 工 | 強 |
| ③世ヅク | ア | 族 | イ | 俗 | ウ | 続 | 工 | 属 |
|      |   |   |   |   |   |   |   |   |
|      |   |   |   |   |   |   |   |   |
| ④攻セイ |   |   |   |   |   |   |   |   |
- 問2 本文中の、並ぶ者のない<sup>（1）</sup>と同じ意味用法の「の」を、本文中のaからdまでの中から一つ選べ。
- a またぐのを見る    b 気の立っている    c 他の馬に    d 用心するのだ
- 本文中に、「馬乗り」の馬乗りたるところ<sup>（2）</sup>とあるが、「吉田と申す馬乗り」が述べている馬乗りの心得の説明として最も適当なものを、次のア

（藤本成男『徒然草のつれづれと無為』による）

から工までの中から一つ選べ。

ア 自分が乗ろうとしている馬をよく見てその気性を把握したり、馬具などで気にかかる点があれば馬を走らせないようにしたりするなど、当然のことをよく理解し自然に行動できる。

イ 人の力は馬の力には到底及ばないと知ったうえで、自分が乗ることになっている馬を観察しながらよい部分を見極め、その馬の能力のすべてを引き出せるよう自然に行動できる。

ウ 繩や鞍などを装着したときの反応によってそれぞれの馬の気性を知ることができるので、馬具の状態をよく確認することを通じて、馬のよしあしを自然に見抜けるようになる。

エ 人は馬の真の力に勝つことができないということをよく知り、自分が乗る馬の強いところ弱いところの両面を十分見極めることによって、馬のよしあしを自然に見抜けるようになる。

問4 本文中に、<sup>(3)</sup>きわめて合理的な判断 とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアから工までの中から一つ選べ。

ア 馬の体格に自分の性格を合わせられない人は落馬するということを、体験的に知ったうえで下す判断。

イ 人の体つきと馬の気性の組み合わせが悪いと落馬するということを、体験的に知ったうえで下す判断。

ウ その日の馬の状態を正確に把握できない人は落馬するということを、体験的に知ったうえで下す判断。

エ どんなに有能な人でも気性が荒い馬に乗ると落馬するということを、体験的に知ったうえで下す判断。

問5 本文中に、聖人の戒めに適っている とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアから工までの中から一つ選べ。

ア 低いところまで降りてきた弟子に声をかけた「高名の木のぼり」の言動は、屋外では予想外の出来事が起きるという当たり前のことを当たり前のこととして受けとめ、それが自然に行動に移されたもので、聖人の教えをよく理解したものである。

イ 油断しそうな弟子の性格を見抜き適切に声をかけた「高名の木のぼり」の言動は、才能のないものは失敗するという当たり前のことを当たり前のこととして受けとめ、それが自然に行動に移されたもので、聖人の教えと異なるものである。

ウ 安全な高さまで弟子が降りてきたところで声をかけた「高名の木のぼり」の言動は、失敗は油断から生まれるという当たり前のことを当たり前のこととして受けとめ、それが自然に行動に移されたもので、聖人の教えに通じるものである。

エ 弟子が安全な高さまで降りたときに声をかけた「高名の木のぼり」の言動は、常に細心の注意を払って行動するという当たり前のことを当たり前のこととして受けとめ、それが自然に行動に移されたもので、聖人の教えを踏まえたものである。

問6 本文中に、あえてしないことのうちに積極性があるとあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。<sup>(5)</sup>

ア あえて慎重に振る舞い、一見行動していないうるように見えても、実際は適切な折をとらえてうまくことを運べる機会が来るのを待っている。

イ あえて勝ち負けを無視し、一見勝敗を気にしないように見えても、実際は自然の法則を分析しつつ勝負に出る機会が来るのを待っている。

ウ あえて大胆な行動を控え、一見我慢しているように見えても、実際は成功に強くこだわり競争相手に打ち勝つ機会が来るのを待っている。

エ あえて合理的に考え、一見冷徹に計算しているように見えても、実際は心の余裕を保つことで最後に成功する機会が来るのを待っている。

問7 本文中に、「<sup>(6)</sup>道に携はる人」の心得とあるが、どのようなものか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 自分が他人より優れていると思うことがかえって自分の弱点を見抜かれたり他人に陥れられたりする要因になることを重く受けとめ、どんなときも自分が冷静でいられる道を追究すること。

イ 自分が他人より優れていると思うことが他人から攻撃されたり嫉妬されたりする原因になることをよく知っていて、他人の言動をよく見極め、他人と争うことを避けつつ道を追究すること。

ウ 自分が他人より優れていると思うことがわざわいを招くもとなることをよく知っていて、どのようなときも慎み深く振る舞うとともに、今自分の自分に満足することなく道を追究すること。

エ 自分が他人より優れていると思うことがわざわいを招くもとなることを経験的に理解しており、どのようなときも他人を尊重するよう心がけて、すべての人と調和する道を追究すること。

# 著作権の関係上、非公開

2

次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。

# 著作権の関係上、非公開

(中塚  
なかつかたけし  
武)

『気候適応の日本史

人新世をのりこえる視点』

による)

(注1) 前近代＝明治維新より前の、科学や技術の進歩による資本主義経済がまだ発達していない時代。

(注2) 環境収容力＝ある環境下において、持続的に維持できる生物の最大個体数、または生物群集の大きさ。

(注3) 野放図＝際限がないこと。しまりがないこと。

(注4) 生業＝生活していくための仕事。

(注5) 中世＝鎌倉時代および室町時代。

(注6) 近世＝安土桃山時代および江戸時代。

(注7) 為政者＝政治を行う者。

(注8) 蔓延＝はびこりひろがること。

問1 空欄①、②、③に入る語として適当なものを、それぞれ次のアからエまでの中から選べ。ただし、同じ記号は二回使わない。

ア もちろん イ つまり ウ しかし エ やがて

問2 本文中の、束の間の、介した<sup>(a)</sup>の意味として適當なものを、それぞれ次のアからエまでの中から選べ。

(a) ア 繼続的な イ 少しの間の ウ 定期的な エ 久しぶりの

(b) ア 重視した イ 付け加えた ウ 兼ね備えた エ 仲立ちとした

問3 本文中に、その地域の農業生産量などが許容する範囲<sup>(1)</sup>とあるが、どういうことか。その説明として最も適當なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア その地域で生産される農作物の総量などが、その地域の人口や生活水準をどの程度満たせるかという範囲。

イ その地域の人々が、農作物などを最大限生産し続ける状態をどれくらいの期間継続できるかという範囲。

ウ その地域で生産される農作物の量などが、その地域の人口や生活水準を持続的に維持できる範囲。

エ その地域の人々が、自然環境に悪影響を与える農作物などを持続的に生産できる農地面積の範囲。

問4 本文の破線部A・B・Cの内容に対応する矢印を、それぞれ図1のアからエまでの中から選べ。ただし、同じ記号は二回使わない。

A あるとき数十年周期の気候変動が起きて農業生産力が増大した

B 数十年周期の変動の場合は豊作の期間は一〇年や二〇年も続くので、その間に人々は豊作に慣れて、人口を増やしたり（出生率をあげたり）、生活水準を向上させたりした

C 飢饉の発生や難民の流出によって半強制的に人口が減らざるを得なかつた

問5 本文中に、数十年周期の変動は、予測も対応も難しい時間スケールなのである。とあるが、なぜか。「対応が難しい」理由の説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。<sup>(2)</sup>

ア 住民の人口が増加を始めたときには、既に気候変動で生産力が減少しているが、その時点から計画的に農業の技術革新を進めて生産力を高めようとしても、計画の実現には人間の寿命と同じ数十年単位の時間が必要となり、対応が間に合わないから。

イ 生産力の減少期には、それまでに増大した全人口が生存可能なだけの食糧を確保できなくなるが、生まれる子供の数をその時点で減らし始めたとしても、人口が十分減るまでには人間の寿命と同じ数十年の時間がかかり、対応が間に合わないから。

ウ 住民の人口が増加を始めると人々の生活水準も上がっていくが、その時点で住民は既にぜいたくに慣れてしまってより多くの食糧を求めるようになり、その人々の寿命である数十年の間は同じ状況が続いてしまい、結果的に対応が間に合わないから。

エ 生産力の減少期を迎えたときには、気候は再び増産可能な方向で安定し始めているが、その時点で既に人間の寿命である数十年単位の人口減少が続いているため、農産物の増産を可能にするだけの労働力を確保できなくなり、対応が間に合わないから。

問6 本文中に、<sup>(3)</sup>その状態に過適応してしまっていたとあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 災害がなく気候もよい状態を当然のように受け入れて、人口を増やします豊かな生活をおくる一方で、生産力が減少するかもしれない事態への備えを怠つていた。

イ 災害がなく気候もよい状態を普通だと考えて、従来通りの方法だけで農業生産力を維持できると思い込み、豊作を継続させるための技術革新や農地拡大を怠つていた。

ウ 災害がなく気候もよい状態が続くことを当然であると信じて、農業技術の革新により、市場での競争に打ち勝ついく一方で、穀物を備蓄する量も増やし続けていた。

エ 災害がなく気候もよい状態が生存には最適だと判断して、生産力の拡大を続ける一方で、他国との闘いを繰り返し、より温暖で災害の少ない地域に進出し続けていた。

問7 本文中に、そのこと<sup>(4)</sup> とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 農業生産力が高い時期と、縮小に転じた時期とでは必要な対処が異なるため、それぞれの時期に応じた適切な対応が必要だということ。

イ 他国と闘う中世と、市場での競争が求められる近世とでは必要な対策が異なるため、それぞれの時期に応じた政策が必要だということ。

ウ 気候変動と人間社会との間には、長年続いた複雑な関係があるため、気候変動への適切な対応には歴史的知識が必要であるということ。

エ 社会の為政者と構成員とでは、状況に応じて取るべき対処がそれぞれ異なるため、日頃から両者の密接な連携が必要であるということ。  
問8 本文中に、平時<sup>(5)</sup>における環境悪化・災害発生への備え・適応力が問われているとあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 日常生活の中で人々がどんな心理に陥りやすいか想定しておくことで、緊急時に取るべき対策を決める手がかりを得ることができ、社会の復元力を高めることができるから。

イ 災害が起きた後に社会はどう対応したかではなく、災害が起きる前に社会は災害にどう備えていたかを問題点とすることが、気候適応史研究を特徴づけている視点であるから。

ウ 日頃から自然災害や気候の変動を正確に観測し、大規模な被害につながるすべての可能性を想定しておくことで、被害が起きた後早急に復興をはかることが可能となるから。

エ 気候の悪化や自然災害に伴つて起きる大規模な社会の混乱を防ぐには、自然災害や環境変動が起きた後の対策だけでは十分でないことが、これまでの歴史で明らかであるから。

次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。

3

# 著作権の関係上、非公開

# 著作権の関係上、非公開

# 著作権の関係上、非公開

**著作権の関係上、非公開**

# 著作権の関係上、非公開

- 問1 本文中の、話の腰を折る、腑に落ちない の意味として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つずつ選べ。
- (a) ア 話の途中でその場から離れる  
ウ 話の途中で急に口を閉ざす  
ア 想像できない イ 納得いかない  
ウ 信じられない エ 気に留めない

(注1) 納戸＝普段使わない家具や食器などをしまっておく物置用の部屋。 (注2) スミ＝藤巻先生の奥さんの名前。

(注3) 卷積雲＝うろこ状、またはさざ波のように広がる雲。いわし雲。 (注4) 積雲＝晴れた日によく見られる、白いわたのような雲。綿雲。

(滝羽麻子)  
『博士の長靴』による)

問2 本文中に、先生は目を輝かせた。とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。<sup>(1)</sup>

ア 貸していた本を返してもらえるのがうれしかったから。

イ 今関心を寄せてている学問の話ができると期待したから。

ウ ふたりになつたところで急に話しかけられ驚いたから。

エ 退屈だったのが自分だけないとわかり安心したから。

問3 本文中の破線部の場面について話し合っている次の会話文の [ ] に当てはまるものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

生徒1 「先生はおざなりな生返事をしたきり、見向きもしない。」とあるけれど、どうしてだろう。先生は和也の絵をひさしぶりに見たい、と言つていたのに。

生徒2 僕と本の話をしているうちに、和也の絵の話は忘れてしまつたんじゃないかな。超音波風速温度計の話を続けようとしているもの。

生徒3 こんなふうに自分の世界に入り込んでしまつと周りはついていけないよね。「奥さんも困惑顔で呼びかけた。」とあるよ。

生徒1 でも、「先生がはつとしたように口をつぐんだ。」とあるから、さすがの先生もすぐに事態に気づいたようだね。

生徒2 そうだね。周囲もほつとしだらうね。「僕は胸をなでおろした。たぶん奥さんも、それに和也も。」とも書かれているよ。

生徒3 ちょっと待つて。先生は「ああ、スミ。悪いが、紙と鉛筆を持ってきてくれるかい。」って言つているんだから、先生がはつとしたように口をつぐんだのは、[ ]

生徒1 そうか。それで和也は「踵を返し、無言で部屋を出ていった。」わけか。この親子の関係は、あまりうまくいっていないみたいだね。

ア 僕のために雲の絵を解説してあげたいという気持ちがあつて、それには紙と鉛筆が必要だと思つたからじゃないかな。

イ 奥さんの声を聞いて、今自分がいるのは大学の研究室じゃなくて自宅の和室だつてことに気づいたからじゃないかな。

ウ 学問についてふと頭に思い浮かんだことがあつて、忘れないうちにそれをメモしておこうと思つたからじゃないかな。

エ 和也の絵に雲の名前を書いていないところがあつて、書き足そうと思つていたのを急に思い出したからじゃないかな。

問4 本文中に、腕組みして壁にもたれ、暗い目つきで僕を見据えた。とあるが、このときの和也の気持ちの説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 父親の求めで絵を探しに行つたのに結局は無視されて、いつも周囲を振り回す父親の身勝手さを改めて思い知らされ、嫌気がさしている。

イ せつかく父親が自分の絵に関心を向けてくれたのにわざと学問の話を始め、父親の関心を奪つていつた僕に対し、強い反感を抱いている。

ウ 息子の絵のことなど忘れ、僕を相手に夢中で学問の話をする父親の姿に、やはり父親は自分に関心を向けてくれないと感じ落胆している。

エ 家庭教師の僕がもう少し熱心に教えてくれれば成績が上がり、父親の関心が自分に向くようになるはずなのにと思い、僕を非難している。

問5 本文中に、妙に落ち着かない気分になつていた。<sup>(3)</sup>とあるが、なぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 父親との親子関係をなかなかうまく築けない不満と焦りでいらだつ和也を見て、その原因の一端が自分の存在にあるのではないかと疑い始めているから。

イ 今まで見たこともないほど楽しそうにしている父親の姿に傷つく和也を見て、自分がかつて親に対して抱いた思いが呼び覚まされそうになっているから。

ウ 学校の成績に劣等感を抱いて落ち込む和也を見て、家庭教師の自分が勉強を十分に見ていた結果だと思つて打ちのめされそうになっているから。

エ 楽しそうな父親の姿に驚いている和也を見て、学問の話題が二人を隔てていることに気づき、先生と和也の仲を取り持たなくてはと思い始めているから。

問6 本文中の、「わからぬひとだよ、きみのお父さんは。」<sup>(4)</sup>という僕の発言の意図として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 先生は不器用ながらも先生なりに息子のことを考えていると、和也にそれとなく気づかせようとすると同時に、物事も人もわからないからこそおもしろく、向き合う価値もあるのだと伝えようとしている。

イ わからないからこそ世界はおもしろいのだと考え、役に立ちそうもない気象の研究に一心に打ち込む父親を見習つて、役には立たないかもしれないが和也には絵の道に進んでほしいと伝えようとしている。

ウ 熱心な研究者であるなら息子にも学問をさせたいと考えるのが普通なはずなのに、息子には得意なことを好きにやらせたいと考える先生が僕にもわからず、自分も和也と同感であると伝えようとしている。

エ 僕自身も先生がどういう人なのか今でもよくわからないが、それでも学問の師として尊敬しており、たとえ父親のことがわからなくても息子として和也も父親を敬うべきではないかと伝えようとしている。

問7 本文中に、軽やかにはじける光を神妙に見つめる父と息子の横顔は、よく似ている。とあるが、この一文の表現効果の説明として、最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。<sup>(5)</sup>

ア 共通の趣味である花火を、父と協力して楽しむ和也の横顔が父親と似ていると言及することで、今の先生と和也は似た者同士であるからこそ

仲が悪いが、近いうちに何らかのきっかけで仲直りするだろうということを暗示する効果。

イ 隣に並んで花火をしてはいるが、場を取り仕切る父親に嫌悪感を抱く和也の横顔が父親と似ているからこそ和也の反発は根深く、簡単に打ち解けることなどできないということを暗示する効果。

ウ 父親と一緒に花火に夢中になつて、日頃の対立を解消した和也の横顔が父親と似ていると言及することで、先生と似ているから逃げていたが、将来父親と同じく学問に夢中になるはずだということを暗示する効果。

エ 父に火をもらい、一緒に花火をしている和也の横顔が父親と似ていると言及することで、先生と和也の親子関係が現状では必ずしもうまくいっていないとしても、親子としてのきずなで結ばれているということを暗示する効果。

